吉野中学校校歌

佐佐木信綱　作詞
信　時　潔　作曲

♩＝約 100

斉唱

1. はなよりあくるみよしのを
2. よきひとよしとよくたへ

二部合唱

3. ふりにしをりみちかへて

わがふるさとともおひたてる
みしやまやまもゆくみづも
ひとさまざまの世はひろし

いのちのつぼーみすこやかに
興ーぢーかげーはうつろへど
よき師よともーよ手をとりて

きよくきびしくはぐくまむ
とはにつらぬくひとすぢは
ともにまなばむけふもまた

ちかひにーつどふわれーらなり
ただしきーものれきーしなり
はげまむわれらあすーもまた

広報 よしの

編集・発行　吉野町役場、　印刷、吉野印刷所

町の動き

世帯数	4.346戸
人口	1.8855人
出生	32人
死亡	10人
転出	67人
転入	65人

（2月1日現在）
住民課調べ

2月の行事

6日　成人病検診（吉野、中荘地区）吉野地区税務協議会総会（大淀町）
7日8、10、12　農業基本調査説明会
10日　吉野郡婦人学級発表会（吉野校舎）
12日　農業委員会（役場会議室）
14日　米穀店の登録変更受付
15日　上市、国栖保育所入所児募集〆切
22日　吉野中学校々歌発表会（吉野校舎）
25日　町内農業部落団体長打合会（役場）
中旬　国民健康保険運営協議会
下旬　吉野町商工会理事会

おもな目次

吉野中学校校歌　1.4.5頁
吉野町スポーツ実態調査まとまる　2頁
新区長、町内会長等きまる　7頁

奥田知事"四選"なる

—全町の投票率 80.10%—

知事選挙投票日の一月三十日は、早朝から強風で雪がちらつくという悪いコンディションに有権者の出足が心配されましたが、本町では九、一〇二人が悪天候にもめげず清き一票を行使、投票率八〇・一〇%で、これは前回の知事選挙の七八・七一%を上まわる成績で投票所別では第二二投票所が九一・三%で第一位でした。本町での候補者別の得票数は

奥田良三　五四〇九票
服部安司　三五二一票
速水泰妙　二八六七票
門真竜一　二七〇票
山中一妙　二〇票

投票区別投票率調

投票区	投票所区内大字名	有権者数	投票者数	投票率%
1	上市全地区	2.046	1.613	78.8
2	吉野山、下、中	613	498	81.2
3	〃　上	341	275	80.6
4	丹治、橋屋一部	858	673	78 4
5	飯　貝	555	411	74.0
6	左曽、橋屋一部	387	317	81.9
7	六　田	415	346	83.3
8	楢　井	268	223	83.2
9	御園、宮滝 喜佐谷、菜摘	676	502	74.2
10	樫　尾	181	154	85 0
11	矢　治	144	120	83.3
12	新子、窪垣内	690	521	75.5
13	国　栖	302	257	85.1
14	南　国　栖	240	203	84.5
15	南　大　野	384	304	79.1
16	八　野	88	73	82.9
17	柳	557	443	79.5
18	香　東	251	214	85.2
19	色　生	141	127	90.0
20	三　茶屋	141	126	89.3
21	小名、殿川	185	151	81.6
22	三　津	46	42	91.3
23	滝　畑	45	41	91.1
24	志　賀	163	139	85.2
25	千　股	269	227	84.3
26	河　原屋	269	223	82.9
27	平尾、山口、佐々羅、西谷、隆寺	1.108	879	79.3
総計		11.363	9.102	80.1

吉野中学校校歌きまる

このほど、次のように吉野中学校校歌が新しく出来ました。これは上市阪本千代氏が、中学校新校舎建築を記念し、作詞、作曲者に直接依頼され、出来あがったもので、費用一切は同氏が負担寄贈されました。

吉野中学校校歌

日本芸術院会員　佐々木信綱　作詞
日本芸術院会員　信　時　潔　作曲

一

花よりあくる　み吉野を
わがふるさとと　生ひ立てる
生命のつぼみ　健やかに
清くきびしく　はぐくまむ
誓に集ふ　我らなり

二

よき人よしと　よく讃へ
見し山々も　ゆく水も
興亡影は　うつろへど
永遠に貫く　一すぢは
正しきものの　歴史なり

三

古りにし栞　道かへて
人さまざまの　世は広し
良き師よ友よ　手をとりて
ともに学ばむ　今日もまた
はげまむ我ら　明日もまた

（楽譜は四、五頁に掲載してあります）

校歌について作詞者のことば

吉野中学校々歌の作詞者佐々木先生は作意について次のように述べて居られる。第一節は名に負う日本の名勝吉野に良き中学生活を築きゆく幸をのべた。

冒頭は

花より明くる　　み吉野の
春のあけぼの　　見渡せば
もろこし人も　　高麗人も
やまとごころに　　なりぬべし

という二川相近作の今様に拠った。

第二節は、この地の歴史性にこもる気品の高さを讃へた。冒頭は万葉集巻一なる天武天皇の御製

叔き人のよしとよく見てよしと
言ひし
芳野よく見よよき人よく見つ

をお借り申しあげた。左註に「紀に曰く、八年己卯五月庚辰朔甲申、吉野宮に幸す」とあるから、西紀六七九年のことであった。この八年は、新しい歴史の研究の結果七年が正しいのである。

第三節は、広く、ゆたかなおのがじしなる未来への限りない前進を歌った。

特に節のはじめに据えたのは、吉野には極めて縁の深い西行上人の作

吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ
—山家集—

によった。道は、多岐である。旧道かならずしも正道ではない。風光と歴史とに恵まれたこの山間の地から巣立って、遙かな人生の大海に舟出してゆく若き人々への、心からなる祝福の思ひをこの一節にこめたのである。以上、筆のまにまに書きとどめて、明けて九十二翁の「吉野」の地と人とに寄せる愛の記念としたい。

（広報はとじて保存しておくと役立ちます）